

第30期目録委員会記録 No.15

第15回委員会

日時：2006年9月2日（土）14時～17時

場所：日本図書館協会5階会議室

出席：永田委員長，荻原，鈴木，原井，平田，古川，増井，横山，渡邊
<事務局>磯部

[配付資料]

1. 『日本目録規則 1987年版改訂3版』についての疑問など（2ページ-A4 柴田正美氏）
2. IME ICC4 Programme（2ページ-A4 事務局）
3. IME ICC4 Working Groups（2ページ-A4 事務局）
4. ISBD統合版について（未完）（7ページ-A4 渡邊委員）
5. 第30期目録委員会記録 No.14（案）（2ページ-A4 荻原委員）

[検討事項]

1. 来年度の図書館大会

来年度の図書館大会は東京で開催されるが、地域の実行委員会が組織されないため、テーマ別分科会は委員会で主催することになる。目録委員会はどうか。21日に意向を示す必要がある。

- ・整理技術の面で国内の図書館員に問題意識があれば、開催する必要がある。
- ・今期は来年3月までだが、やるつもりなら準備だけはしておかねばならない。
- ・現在、委員会から問題提起をする必要があるか。
- ・もうOPACという時代ではない、といった点はある。だが、問題が根本的すぎて取り上げるのは難しい。

2. NCR87R3の正誤表について

資料1を中心にして、NCR87R3に必要な訂正事項について検討した。

- ・例として挙げている著者標目の付記事項への没年の追加訂正はしない。団体名についての例で省庁再編に対応していないのは、利用者の便宜を考えれば修正した方がよいが間違っているわけではないし、今後の課題として今回は訂正しない。
- ・1.5.0.0など通則にある「付属物・添付物」という表現については、図書館用語ではなく、同義語を日常語として挙げているものであるため、訂正も定義もしない。
- ・付属資料のうち、どの範囲のものを形態と注記事項に記録し分けるべきかについては混乱もみられるし、実際に適用はなかなか難しいところがある。
- ・目録の対象を表現形とするかという問題に結論が出て全体から整理されないと、この

あたりまで整合性のとれる形に収まらないのではないか。

- ・付録2.4の「月名（英語の）の略語」のレイアウトが他付録とは異なっている。作成者への確認が必要か。
- ・付録のカード見本の件名をBSH 3版から4版のものに更新する。

3. IME ICC 4報告

全体について永田委員長より報告があり、その後WGごとに参加者から報告がされた。

<全体>1日目は、カントリー・レポートが日中韓以外にもネパール、インドネシア、カンボジア、スリランカから行われ、かなり広範なものとなった。中で注目すべきはインドネシアからの報告であった。日本からは、読みと階層の問題を特に訴えた。

2日目は、ワーキング・グループだったが、ICPに合意するかどうかという点が最大の課題として掲げられていた。

全体を通しては、indispensable access pointの意味は、重要な話題であったかもしれない。また、終了後に日中韓3国で会食する機会もあって、北東アジアの意見を出していくべきだといった率直な意見交換を行えた。

昨年の韓国国立中央図書館が開催した60周年記念のシンポジウムの時点から、この会議に向けての韓国の意気込みはかなりのものであった。

<WG1（個人名）／渡邊>参加者は13人で、韓国7名、中国2名、日本1名、他にフィリピン、インドネシア、スリランカからであった。リーダーのBen Gu氏が関連する条文ごとに意見をきいていくという形式であった。

日本、中国、韓国では非基本記入方式なので違和感を持つ向きもあったが、文言は同方式でも対応できるように考えられているということで合意した。

カンマの問題については、日本は使用、中国、韓国は不使用ということがわかった。

読みについて説明したが、必ずしも理解してもらえたわけではなく、日本の特殊事情と受け取られたようだった。韓国では、すでに漢字をあまり使用していないという事情もある。

中国から、同名異人が多く、目録規則上でも区別をつけなければならないとしていないし、今後も無理と考えている。韓国も同名異人が多いことについては同様である。

韓国から、生没年は個人情報であるので抗議などあるという話題も出た。

AACR2を使用しているフィリピンからは、著者基本記入方式の重要性と維持を強調する意見があった。

<WG2（団体名）／横山>9名、うち韓国が5名、後はマレーシア、タイ、香港、日本から。リーダーは香港の人。

5.4.1.1の政府機関の内部組織の表し方に国名を冠するという規定になっているが、どこも自国についてはやっていない。しかし、それはドメスティック・ルールとして国際的に情報交換するときに工夫できるし、問題ないだろうということになった。

5.1.2.1.2で、団体名の大きな変更があったときはレコードを独立させて相互参照するといっている。これが、7のアクセス・ポイントに反映して、相互参照形もindispensable access pointになるのではないかと、との指摘があった。7.1.2.2が典拠レコードに関する条項でvariant formsもアクセス・ポイントとすることになっているが、メンバーによってvariant formsの捕らえ方が違っていることがわかった。大勢は「を見よ」参照を意味すると認識していたが、「を

も見よ」参照も含まれているという意見もあった。ここが「を見よ」参照を意味するのであれば、アクセス・ポイントとして相互参照形を入れるべきだということになり、部会からの提案となったが、全体会では否決された。

団体名というより規則全体に関する議論が他に幾つかあった。indispensable access pointに出版年が入っているが、3.1.2では出版年は二次的な要素とされているので、整合性もとれていない。出版年はadditional access pointでよいという提案をしたが受け入れられなかった。

誤字、脱字についての指摘があり、それは受け入れられた。

<WG3 (逐次性) /原井>6名 (韓国3名、中国1名、日本2名) で最小であり、すべて独自の非基本記入制の目録規則を持っている国で議論はしやすかった。ICPについては、特に大きな問題なしということになった。時間の大半はISBDの話に終始した。

3国ともISBD (CR)のタイトルのメジャー・チェンジ規定については、違和感を持っている。特に、語数をカウントして最初の5語までと6語以降という区分は困難だという点は、3国とも同意した。この点については、抽象的レベルで配慮してほしいという提案を行った。継続して議論し、ISBDに対する要請をしようということになっている。

状況としては、日本はすでにNCRを改訂したが、中国はこの2年くらい改訂に向けてISBDとCCRの異なる点などを詳細に研究中、韓国はKCRを2002年に改訂したばかりで、現在は研究を開始したところ。

逐次刊行物の定義からすると逐次刊行物となるが、終期を予定していないが固有のタイトルを持っているような出版物は日中韓では非常に多いことが問題となった。

中国では、ISSNセンターは逐次刊行物の許認可をする役所であり、図書館とは連携していないし、協力は困難であるといった事情がある。韓国では事情は異なるようだが、やはり連携は困難なようである。

<WG4 (統一タイトルとGMD) /増井>7名 (日本3名、韓国、フィリピン、スリランカ、中国) で、リーダーは慶応の酒井由紀子氏、日本以外の人は大学で教えている人だった。

ICPの統一タイトルを規定している条項の確認からスタートし、「独立したタイトル、名称・タイトルの複合体、または団体名、場所、言語、日付等の識別要素を付加することによって特定されたタイトル」であると5.5にまとめられた中で、「名称・タイトルの複合体」における「名称」について、「団体名」「場所」との関わりも含めて、多くの議論が交わされた。最終的には文章は変えずに、Glossaryの一般的な定義とは別に、付記あるいは注記するような形で入れてはどうかという提案をした。

また、アジア各国の、キリスト教圏とは異なる文化的基盤の上に成立した聖典や古典籍について、それが作成された国において統一タイトルを用意する責任を負うべきであるとの共通見解により、この点に言及した新たな条項の提案を作成した。

GMDについては、あまり検討する時間がとれなかった。表現形に関わるGMDの検討を行い、用語解説の必要性、現在表現形の様式と体现形の形態との用語が混在したものとなっていることから、専門用語の調整や包括的なリストの必要性を提示した。

<WG5 (マルチボリューム/マルチパート) /永田>日本4名、中国、韓国、シンガポール、ネパール各1名の計8名で、リーダーは韓国のユン・チョンオク氏。

ICPとその用語集のレビューを行い、利用者重視の観点を前面に出すべきだなどといった指摘から始まった。

日本の関心は参加者が多数だったように非常に高く、NIIの宮澤彰氏が「パイプの煙」の続・続々の例を出して、元々相互に内容が異なっているこのような例と版の違いは、同じ体現形であっても、全く意味が異なるという話題を出した。これは、続・続々や上・中・下といった刊行形式はアジアには非常に多いのに、FRBRでは適切に対応しきれていないのではないかという非常に面白い問題提起であった。しかし、この問題への理解が参加者によってかなりまちまちであったため、議論は熱を帯びたがそれを消化しえなかった。

indispensableの意味は、primaryなのかmandatoryなのかという点が議題となった。

Glossaryに”physical unit”の定義を入れるべきとの提案を行った。

4. ISBD (Consolidated Edition) について

渡邊委員が資料4を元に説明して、議論を行った。

- ・ ISBD (Consolidated Edition) は、ただ寄せ集めただけではなくて、FRBRとのマッピングを行った上で、作成しているといっている。このあたりについて、議論して意見を提出するか。
- ・ アジアからの意見がないとElena Escolano Rodoriguez氏から言われた。是非、アジアからも意見を出していきたい。IME ICC4がらみのSerialityについての意見など、まとめていきたい。

5. その他

- ・ 図書館雑誌に載せるIME ICC4報告は、各WG報告を参加した委員が書いて、それも加えて永田委員長が全体をまとめる。

次回以降の委員会の予定

10月28日 (土) 14:00～

11月25日 (土) 14:00～ (仮)

12月16日 (土) 14:00～ (仮)

以上